

2024 ESTRO school 開催報告

教育委員会委員長 内田伸恵

2024年6月21日(金)～23(日)に大阪の千里ライフ・サイエンスセンターにおいて2024 ESTRO School, Multidisciplinary Management of Lung Cancerを開催しました。ESTRO School はプログラム数が豊富であること、講師陣と内容が充実していることで定評があり、世界中から多くの受講者が参加しています。JASTROとESTROは2015年にMemorandum of Understanding (MoU) を締結し、学術的そして教育的な交流を進めています。これに基づき2016年からESTRO Schoolを2年に1回、両学会共催として日本で開催しています。2016年乳がん、2018年は頭頸部がんの集学的治療がテーマで、受講者の満足度も大変高いものでした。引き続いて2020年に開催する予定で準備を進めていましたが、COVID-19感染症の世界的流行のため何度も延期となってきました。今回無事に肺がんの集学的治療をテーマに実施できたことは、関係者一同にとって大変感慨深いものでした。

講師陣は、コース責任者のProf. Van Houtteをはじめ放射線治療医、放射線診断医、腫瘍内科医、

胸部外科医など肺がんの専門家集団です。3日間のコースは肺がんの診断から治療までの系統的講義、治療方針に関する講師同士の熱心な討論、受講者も参加する症例検討などインタラクティブなものでした。コロナ禍の最中にESTRO側と延期について検討した際、「オンライン開催ではなく、あくまでも日本での現地開催の実現を目指す」との意向がありました。講師陣の教育への熱意を肌で感じ、受講者が熱心に討議に参加する様子を見るにつけ、会場開催の素晴らしさを再認識しました。

JASTROから55名、ESTRO経由が19名が受講しましたが、本特集では参加された2名の先生に寄稿をお願いしました。そしてlocal organizerとして準備と運営に大変尽力された松尾幸憲先生に、参加者アンケート結果の報告と総括をお願いしています。

教育委員会は日本でESTROの豪華講師陣から直接学ぶことのできるESTRO schoolを、今後も継続的に開催できるよう調整してまいります。次回は2026年の予定です、皆様の多数のご参加をお待ちしています。



図1. 症例検討の司会をするコース責任者の Prof. P Van Houtte



図2. Coffee time : 情報交換やディスカッションに話がはずみました



図3. 教育委員会の ESTRO school 担当者一同

～外へ出よ、外科医とワインを飲もう～

仙台厚生病院 三輪弥沙子

2024年6月21日～23日の3日間、ESTRO-JASTRO共催の『2024 ESTRO School, Multidisciplinary Management of Lung Cancer』が、大阪府の千里ライフサイエンスセンターで、前回2018年からコロナ禍を経て、実に6年ぶりに開催されました。

今回は治療法の変化が近年特にダイナミックな肺癌の集学的治療がテーマです。IV期遺伝子変異陽性例よりも治らないIII期、等と言われてきた数年前までから、免疫チェックポイント阻害薬の登場、放射線治療技術の進化で劇的に成績が変化してきた今この時、肺癌を多く扱う施設にあって日々悩んでいるところでしたので、開催を心待ちにしておりました。

ESTRO schoolの醍醐味は、EORTC、ESTRO、ESMOなどで活躍され、各ガイドラインやtrialのfirst authorであるような先生方が、放射線治療分野だけでなく、外科、がん治療、薬物療法、放射線診断と、しかも複数ずつ、正に臨床医療チームのような形で集まって、疫学から各分野を系統的に、さらに最新の知見をふんだんに盛り込んで講義をして下さるところです。今回も総勢9名の講師の方々がいらっしゃいました。

昨今のIFRTの流れに則ってか、前3回に見られたcontouring classが今回はなく、資料の事前・当日紙ベースともに配布もなく、学生時代のようにまっさらなノートを数冊買い込んで講義に臨みました。

まず始めにコース責任者のvan Houtte先生より「能動的に講義を受け、積極的に質問して下さい。どんな質問でもいいです。一番良くないのは静かにしていることです」と呼びかけが有り、久しぶりの全編英語漬けに頭を切り換えます。

講義は疫学、画像診断のpitfall、縦隔のstaging、TNM分類の変化、スクリーニングのポイントといった、今更聞けない知識をブラッシュアップする内容から始まります。ここで用語の齟齬や取り扱い方も共有し、この後の講義で混乱しないようにすりあわせがなされました。

下地ができたところで、早期肺癌、化学療法、免疫チェックポイント阻害薬、小細胞肺癌、局所進行肺癌、オリゴ転移、緩和療法まで、外科医・がん治療医・放射線治療医それぞれの立場から深く、時には活発な議論を交えながら講義が続きます。

昨年末に結果が出たPacific2試験や直前のASCOで発表されたLAURA試験など、化学放射線療法に関係の深いtrialの最新の報告まで網羅されており、普段薬物療法を系統的に学ぶ機会に乏しいこともあり、貴重な機会でした。そしてこの薬物療法が目まぐるしい進化の時代にあつて、放射線治療や手術の役割がさらに議論され、展望が提示されていきます。

印象的だったのは、どの先生方も自分がそれぞれ

のtrialに関わって知見が積み上げられていく現場にいたからこそその実感がこもっていたことです。日常臨床でも先達の先生方からいつも言われていたことではありますが、trialの結果やガイドラインは金科玉条の物では決してない、全て今よりも過去の治療法や症例であり、しかも症例を集積する際のそれぞれの施設水準(治療内容の質)もみることが大切であること、データの見方や統計処理の仕方によって議論の方向性が変わってくることを、それらを踏まえた上で注意して自分で評価することが大切であることが繰り返し語られました。

毎日最後のセッションで行われる症例検討では、実際先生方が経験された症例を提示されて参加者に次々と質問が振られるのですが、矢継ぎ早に繰り出される英語のやりとりに必死に食いつく余りなかなか答えや質問が出せず、そのうちに講師の先生方から症例に対する質問と議論がまるで実臨床のキャンサーボードさながらに繰り広げられ、圧倒されました。

それぞれご高名な先生方も、私達と同じ、日々患者を目の前に悩み最善を尽くす一人の臨床医そのものでした。だからこそ、個々の症例はキャンサーボードなどで多科/多職種で横断的に検討するのが重要なこと、あくまでもデータは下敷きに、最初から最後まで中心にいるべきは患者である、ということに立ち戻るべきと話されていました。

3日間で一番響いたのは、放射線治療のPutora先生が「外科治療と放射線治療」の講義の中で言われた「外へ出よ、外科医とワインを飲み、臨床の考え方について議論を交わそう。」という言葉です。その外科医の臨床への姿勢や考え方、医局の事情など、キャンサーボードや院内の公な場ではなかなか言えない本音は、病院の外でこそ聞けるものかもしれない、それらが実はtrialや患者の棲み分けの条件に密接に関わっているのかもしれない、病院の外で、他科の先生やコメディカルと交流を深め、それを院内の関係に生かすことが重要だと他の先生方も口々に話されます。日本でも大事な話は居酒屋や喫煙所(筆者は非喫煙者ですが)で語られることが多いものですが、呑みニケーションは世界的に生きているのだなあ実感しました。

「積極的に質問を」の言の通り、私の拙い英語での質問や認識不足から出た投げかけにも、皆さん気を悪くしたりせず丁寧に答えて下さり、特に放射線治療のLe Péchoux先生には熱心に答えて頂き、とても濃密で有意義な3日間でした。

ESTRO schoolに根本教授と初参加させて頂いたマレーシアのBiologyから12年、毎回こうして貴重な機会を与えて頂けるのは本当にありがたく思います。

最後に、コロナ禍を越えて今回のESTRO school

を企画して下さいましたJASTRO教育委員会の先生方、特にコーディネーターの松尾幸憲先生、教育委員長の内田伸恵先生、ESTRO schoolの各講師陣・スタッフの方々、本当にありがとうございました。次回

開催を楽しみにしております。

= 2024 ESTRO school 印象記

国内にいながらにして海外気分で勉強できるありがたさ

昭和大学病院 放射線治療科 加藤正子

はじめに

今回初めて参加させていただきました。とても良い経験になったので、更に参加者が増えて盛り上がるとういながら感想を書いていきたいと思えます。わずかでも参考になれば幸いです。

内容について

今年は肺癌がテーマでした。1日目は疫学や病理などの疾患背景から始まり、2、3日目は放射線治療だけでなく手術や薬物療法も含めた臨床の講義が繰り返されました。ランチョンセミナーも含めてつながりのある配置がなされ、3日間ずっと肺癌のことだけを掘り下げるのはとても新鮮でした。

後半ともなるとエビデンスの構築が待たれるオリゴ転移や免疫チェックポイント阻害薬を含めた治療などがテーマとなりました。さすがの演者の先生方も時に歯切れの悪い回答をせざるを得ない場面もあり、現実味がありました。複雑な背景の場合、結局はカンファレンスで話し合っ決めてというのは共通で、どの先生も事実を提示した上でご自身の意見を述べられており、とてもかっこよかったです。

新しい話題としては、TNM分類第9版ではN2とM1cが更に細くなることです。N2がN2a (Single N2 station involvement) とN2b (Multiple N2 stations involvement) に、M1cがM1c1 (Multiple extrathoracic metastasis in a single organ system) とM1c2 (Multiple extrathoracic metastasis in multiple organ systems) に分かれます。今後ますます画像診断が治療方針の決定に寄与し、局所治療が生命予後を支えるのではないかと思います。

英語について

まずは疾患名、副作用、薬剤などの専門用語の字面と発音、意味を知っておく必要はあります。配布スライドを見ながら講義を受けることも可能で、もちろん後で見直すこともできます。演者の先生方は比較的ゆっくりとお話くださったので、主催者側からの日本人参加者に対する配慮と感じました。ガイドラインや取扱い規約が頭に入っていると理解も深まるので、一通りおさらいして参加するとより楽しめそうです。

もちろん英語を自在に操れるに越したことはありません。外国人の質問は早口に感じましたし、演者の口からぼそっと出た言葉が実は本音なのかなと思う時もありました。議論をうまく展開させていくのは母国語でも一定の技術や経験は必要です。自身の英語力はあまり気にせず、雰囲気を楽しむだけでも勉強になると思えました。

費用や日程について

参加費は、もしかしたら額だけ見ると普段の学会よりは高額に感じるかもしれませんが、しかし、運営の手間を考えると、むしろこの値段で良いのかと思えるくらいでした。ヨーロッパから遠路はるばる日本までお越しいただいて、一般に海外に行くときに負担となる、時間、お金、時差による体調の変化すべてを演者の先生方が引き受けてくださっています。国内なので、宿泊先や移動手段の手配も海外よりは気軽で、食事や衛生環境、防犯の不安も最小限です。

また、参加区分は2日間と3日間の2種類がありました。平日はお休みが難しくても、土日なら何とかできる場合も考慮して頂けるのはありがたいです。実際に2日目の参加者が一番多く、たとえ1日目のみ参加だとしても有意義な時間になるのではないかと思います。

全体を通して

今回のESTRO schoolは、2024年6月の時点で詳細は未定、2年ごとの開催予定とのことでした。私の中では、毎年の学会とは違ったお祭りのような位置づけになりました。コロナ禍を経てオンラインでの学会も当たり前になってきましたが、今回は対面開催でした。やはり実際に現地へ赴き、皆でわいわいがやがやと過ごすのは楽しかったのだと思います。賢い人たちの知的な会話に触れて、自分も少し賢くなったような気がして、心の中でやけながら帰りました。すでに次の開催が待ち遠しいです。

会場の千里サイエンスセンターが位置する大阪府豊中市は、日本で最初に造られた大規模ニュータウンだそうです。ところどころに昭和の名残を感じる建物や店舗がある一方で、会場建物にはテナントとして塾や予備校が複数入り、駅から徒歩圏内には新築マンションの建設が行われていました。最初にこの地に移

り住んだ人たちの高齢化は進んでいるようですが、同時に若い世代も集めている地域ようです。

肺癌の治療も、今でも現役のプラチナ製剤に加えて、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が台頭し、放射線治療分野ではIMRTや体幹部定位放射線治療が日常臨床で行われるようになりました。まるで肺癌治療の変遷を表すような土地かしら、というこじつけとともに、梅雨空の晴れ間をぼんやりと眺めました。新たな知識を浴びて、たくさん刺激を受けた3日間でした。

= 2024 ESTRO school 印象記

ESTRO/JASTRO 共催 2024 ESTRO School の開催報告

近畿大学医学部 放射線腫瘍学部門 松尾幸憲



この度、ESTRO/JASTRO 共催 2024 ESTRO School のLocal organiserを務めさせていただきました。必要な事後処理をほぼ終えることができ、ホッと一息つきながら本報告を書いております。

思い起こせば2019年4月ミラノのESTRO会場にて、内田先生(JASTRO教育委員長)、石倉先生(2018年のlocal organiser)と共に

ESTRO側の担当者と面談をしたのが、本Schoolの始動でした。肺癌をテーマに2020年5月にESTRO school in Japanを開催することで合意し、JASTRO教育委員会の先生方のご支援を受けながら、準備を進めていました。2019年12月には参加登録を開始し、いよいよ開催と機運が高まっていましたが、2020年1月頃より始まった世界的な新型コロナウイルス流行の影響を受け、同年3月9日にやむを得ず1度目の開催延期の決断となっています。その後はご存知のようにコロナ禍は長期化し、ESTRO Schoolは更に2度の延期を余儀なくされました。今回ようやく2024年6

おわりに

ここまでお読みいただきありがとうございました。私にとって今回のESTRO schoolは、まるで海外学会に行ったような気持ちになれる大型イベントでした。臨床の面白さ、癌という「生き物」の不思議さを改めて感じました。

最後に、不在時に診療等を引き受けてくれた職場の皆と、開催にご尽力いただいたJASTROや運営関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

月21日～23日に大阪千里ライフ・サイエンスセンターにおいて2024 ESTRO School, Multidisciplinary Management of Lung Cancer の開催にこぎ着けました。

コロナ禍の3年間で学会や研究会の在り方は大きく変わりました。Zoomに代表されるオンライン会議の普及です。国内にいながら海外演者の発表を聴くことが容易となり、自身のモニターでスライドを鮮明に見られるという利点まであります。その一方で複数人で議論を行うことには不向きで、どちらかと言えば受け身の学習に陥りがちという欠点があります。ESTRO Schoolをオンライン開催することも検討しましたが、ESTRO 講師陣より現地対面での開催を切望されました。結果的にこの判断は正しかったと思います。

参加登録は、JASTROから55名、ESTRO経由で19名(オーストラリア9名、オランダ2名、カナダ、ニュージーランド、ウズベキスタン、韓国、アメリカ、南アフリカ、ルーマニア、イギリス各1名)の合計74名でした。参加いただいた皆様には厚く御礼申し上げます。JASTRO参加者が伸び悩んだことについては、当方のPR活動が後手に回ったことが影響したかもしれず反省点です。

今回のESTRO Schoolは2日半のプログラムで、



Course DirectorのDr. Van Houtteをはじめ、放射線治療、外科、腫瘍内科、画像診断各領域の専門家8名からなる講師陣より、肺癌の包括的な講義が行われました。ただし、本Schoolの特長は単なる講義ではなく、熱心なディスカッションを伴うところにあります。ESTRO講師陣の中で行われるディスカッションもあれば、一般参加者からも質問や意見を出すことで更に議論が深まっていくこともありました。これはオンライン開催では得られないことのないメリットであり、ESTRO講師陣が現地開催を希望された理由が分かった気がします。聴講するだけであれば苦行に近い2日半となったかもしれませんが、このようにinteractiveなプログラムだったこともあり、終わってみればあっという間でした。

ここで参加者アンケートの結果を一部紹介させていただきます。39名より回答をいただきました。半数は放射線治療専門医取得後6年以上の先生でしたが、一方で専攻医もしくは放射線科専門医の若手も四分の一おられました。講義の難易度、配付資料はそれぞれ90%、80%で適正であるとされました。70%の先生より次回もぜひ参加したいと回答いただきました。自由意見としては、講義毎のディスカッションを評価するものが多く見られました。一方で改善要望としては講義スライドの事前配付を希望する声が複数ありました。スライド事前配付については当方より希望を伝えましたが、直前まで作り込む講師が多くなかなか難しかったようです。

最後に本Schoolの開催に多大な協力をいただきましたJASTRO教育委員会の先生方(内田 伸恵先生、二瓶 圭二先生、石倉 聡先生、伊井 憲子先生、川村 麻里子先生、出水 祐介先生、野田 真永先生、和田 優貴先生)に改めて御礼申し上げます。また当日の運営や会計処理等を助けてくれた近畿大学の関係者にも感謝します。

2年後には2026 ESTRO Schoolを開催予定です。再び多くの先生方と一緒にできることを願っています。



JASTRO NEWSLETTER